

徳島県文化芸術推進基本計画 (素案)

平成31年2月

徳島県

1 策定の趣旨

徳島県では、平成18年3月に「徳島県文化振興基本方針」を策定して、文化芸術の振興を図って参りました。

この間、平成19年及び平成24年に、全国初となる2度の国民文化祭を開催するなど、本県が世界に誇る伝統芸能・文化である「阿波藍」「阿波人形浄瑠璃」「阿波おどり」と、アジア初演の地である「ベートーヴェン・第九」の「4大モチーフ」をはじめとした「あわ文化」の創造・発展に向けた様々な事業を展開してきました。

いま、人口減少の急速な進展をはじめ、文化芸術を取り巻く環境には、大きな変化が見られます。この環境の変化を踏まえ、本県の文化芸術の振興に向けて、施策の「基本的な方向性」や、「目指すべき将来像」、「具体的な取組内容」などを盛り込んだ「徳島県文化芸術推進基本計画（以下「計画」という）」を、新たに策定します。

2 計画の位置付け

この計画は、県政運営の基本となる徳島県総合計画「新未来『創造』徳島行動計画」を踏まえ、定められたものです。

また、本計画は、文化芸術基本法（平成13年法律第148号）第7条の2第1項の「地方文化芸術推進基本計画」及び徳島県文化振興条例（平成17年徳島県条例第22号）第7条の「文化の振興に関する基本的な方針」に位置づけられるものです。

3 推進期間

本計画の推進期間は、平成31年度から平成35年度までの5ヶ年とします。

4 文化芸術を取り巻く環境

(1) 文化芸術基本法の制定

国全体における人口減少の進展は、地域のコミュニティを希薄化、地域文化の担い手不足を深刻化させるなど、地域における文化芸術活動を支える基盤の弱体化が懸念されています。

こうした流れから脱却を図るため、国・地方を上げて取り組む地方創生の動きの中で、国においては、平成29年6月、文化芸術を推進するための法律「文化芸術振興基本法」が改正されたところです。

本改正については、文化芸術そのものの振興にとどまらず、観光やまちづくり、国際交流、福祉、教育、産業など幅広い分野との連携により、文化芸術により生み出される様々な価値を、文化芸術の継承、発展及び創造に活用しようとする趣旨であり、法律の名称も「文化芸術基本法」に改められました。

そして、同法7条の規定に基づき、今後5年間（平成30年度～平成34年度）を見通した文化芸術に関する施策に関する基本計画として、平成30年3月、「文化芸術推進基本計画—文化芸術の「多様な価値」を活かして、未来をつくる—（第1期）」が策定されたところです。

(2) 文化経済戦略の策定

また、文化芸術基本法の制定を受け、文化と産業・観光等他分野が一体となって新たな価値を創出し、その創出された価値が、文化芸術の保存・継承や新たな創造に対して効果的に再投資されることにより、自立的・持続的に発展していくメカニズムを形成することを目的として「文化経済戦略」が文化庁をはじめ関係府省により、平成29年12月27日に策定されました。

いま、地域の文化を支える基盤の脆弱化に対する危機感が広がっていることから、文化への投資を充実させていくためにも、文化が生み出す価値や社会への波及効果を、地域課題の解決につなげていくとともに、地域経済の活性化に向けた起爆剤として、文化芸術の重要性は一層高まっており、文化政策の総合的推進や、新たな政策ニーズへの対応のため、京都移転をはじめとした文化庁の機能強化が進められるなど、文化政策はいま、歴史的転換期を迎えています。

(3) 「東京2020オリパラ」開催と訪日外国人客（インバウンド）拡大

いよいよ、目前に迫った「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」は、スポーツの祭典であるとともに、文化の祭典であり、関西広域連合や全国知事会の提言を受けて、日本の文化を世界に発信する絶好の機会として、日本版のカルチュラル・オリンピックとして「文化プログラム」が、いま、全国的に展開されているところです。

さらに、東京2020オリパラ前年の「ラグビーワールドカップ2019日本大会」、翌年の「ワールドマスターズゲームズ2021関西」の3大国際スポーツ大会の開催に加え、2025年の「大阪関西万博」の開催決定により、今後、一層の訪日外国人客の増加が見込まれており、国の観光ビジョン「明日の日本を支える観光ビジョン」においては、2020年に訪日外国人旅行者数は4,000万人、2030年までに6,000万人を目標指標とされているところです。

こうしたインバウンドの拡大に伴って、日本の文化芸術に対する世界からの関心・注目についても、益々高くなっていくことが予想されます。

(4) 共生社会の実現に向けて

人生100年時代の到来が叫ばれる中、生涯にわたっての社会参加、学習機会としての文化芸術の重要性が高まっています。

また、SDGs（持続可能な開発目標）における「誰一人取り残さない」社会の実現に向けて、人々が文化芸術に参加する機会を通じて、多様な価値観を尊重し合い、他者との相互理解が進む「社会包摂機能」こそが文化芸術の本来的価値であるとして、こうした多様性（ダイバーシティ）を重要視する共生社会の実現に向けて、文化芸術の果たす役割が改めて注目されているところです。

(5) 超スマート社会「Society5.0」の到来

狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、新たな社会として、超スマート社会「Society5.0」の到来が提唱されています。

これまでの情報社会（Society 4.0）では、知識や情報が共有されず、分野横断的な連携が不十分となっていたことから、「Society 5.0」の社会では、IoT

(Internet of Things)で全ての人とモノがつながり、ビッグデータの利用により様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、これらの課題や困難を克服するとともに、人工知能(AI)によるロボットや自動走行車などの技術で、少子高齢化、過疎化などの課題にも対応します。

このような「第4次産業革命」として位置づけられるIoT、ビッグデータ、AIといった社会の変革(イノベーション)を通じて、これまでの閉塞感を打破し、一人一人が快適で活躍できる社会の実現こそが、超スマート社会「Society 5.0」の到来として期待されているところです。

5 これからの文化芸術振興の課題

わが国を取り巻く環境、徳島の現状を踏まえ、「あわ文化」の更なる発展に導くために、どのような方策を図るべきか、その方向性を導き出すために、具体的な課題として、次の「5つの視点」を掲げます。

(1) 県民主役の「あわ文化」推進

文化芸術は、それ自体が2つの「そうぞう（創造・想像）力」を育み、人々の心のつながりや相互理解、多様性を受け入れる重要なツールであり、年齢・性別・ハンディキャップの有無に関わらず、誰もが、文化芸術を鑑賞・体感するとともに、文化活動に参加、発表することができる裾野の広がりを図り、県全体の「文化力」を高める必要があります。

(2) 「あわ文化」の担い手育成

文化芸術の発展は、技量の向上や環境の整備など一朝一夕に実現するものではなく、長い年月を掛けて、また後継者への継承を通じて、遂げられていくものです。少子高齢化の影響は、文化芸術の分野においても、現在の従事者の高齢化を進め、その後継者の育成にも大きな影を落としています。

既存の文化芸術をいかに守り・育て・伸ばしていくか。担い手となる人材の育成・拡大は大きな課題となっています。

(3) 「あわ文化」息づくまちづくりの推進

人口の減少により、地域に根付いてきた伝統芸能や祭り、年中行事の継続や、景観や建築物の保全が危ぶまれる事態が発生しています。長い歴史をかけて、暮らしに息づいてきた「文化」「景観」が風化してしまうことは、住民のコミュニティの減退や、郷土への愛着を希薄化させ、結果、地域の活力を喪失させることへとつながっていくこととなります。

地域ならではの「文化」の継続や「景観」の保全へ、地域住民はもとより、ゆかりの方々をはじめ関係する人々を巻き込んだ展開が求められています。

(4)「あわ文化」による経済・産業の活性化

その地域に息づく「文化」は、人や地域に活力を与える「社会的価値」とともに、観光誘客や商品開発に活かすことにより、需要を拡大・喚起する「経済的価値」を有しています。

地方創生の実現に向けて、文化と経済の好循環を呼び起こすために、既存の文化財や景観、伝統芸能や文化芸術をどう活用していくか、さらに、古くからあるものを、新しい文化との融合を図ることで、新たな価値の創造を図っていくことが活性化の鍵になると考えられます。

(5)「あわ文化」ブランドの発信強化

ネット社会の進展により、ソーシャルメディアや動画配信などの情報発信は驚異的な拡大を遂げており、地域においても、しっかりしたコンセプトに基づくブランディングやプロモーションを求める声は、非常に高まっています。

文化に関しても、単に情報を開示するだけでなく、どう分かりやすく、効果的に伝達していくか、という点はもとより、あわ文化が、いま保有するさまざまな魅力、これから生み出していく新たな価値を、新たな手法も取り入れながら、これまで以上に、国内外の多くの方に伝え、共感を得ていくことにより、徳島自体の知名度、魅力度にいっそうの磨きを掛けていく必要があります。

6 基本的な方向性

前項で掲げた「5つの視点」

- (1) 県民主役の「あわ文化」推進
- (2) 「あわ文化」の担い手育成
- (3) 「あわ文化」息づくまちづくりの推進
- (4) 「あわ文化」による経済・産業の活性化
- (5) 「あわ文化」ブランドの発信強化

に対応して、「あわ文化」の更なる発展へ向けた「基本的方向性」として、「5つの目標」を次のとおり取りまとめました。

取りまとめるにあたっては、これまで「文化立県とくしま」の実現に向け、「あわ文化」の継承発展をはじめとした取組みを踏まえつつ、これまでの常識や価値観では乗り越えることの出来ない「未知への世界」へ踏み込み、切り拓いていくという点を重要視いたしました。

(1) 未知なる舞台！みんなで築く「あわ文化」

県全体の文化力向上へ、県民の文化芸術の鑑賞・体感の機会を拡大するとともに、聴く立場・観る立場から、応援する立場、演じる立場へと、県民主役の文化活動の充実を図ります。

(2) 未知なる開花！根付き、育てる「人材・才能」

文化芸術で研鑽を積まれてきた方を顕彰し、その実績・成果を広めるとともに、後世への継承発展への支援を図ります。また、若い世代への教育・啓発、現役世代から高齢者へのリカレント教育を通じて、あらゆる世代を通じての文化活動の普及促進を図ります。

(3) 未知なる創生！文化の力で「まちづくり」

人口減少により、疲弊する地域への活力を蘇らせるために、県民だけではなく、徳島に愛着を持って応援していただく「徳島ファン」の皆さんの協力もいただきながら、その地域ならではの伝統的な文化・風習・景観などを守り・育てていくことで、その地域のコミュニティを醸成し、郷土愛と誇りあふれる地域づくりを展開します。

(4) 未知なる融合！文化と経済の「好循環」

文化資源の掘り起こしや磨き上げを行うとともに、徳島が全国に誇る「4K・8K」の映像文化や、アニメ文化等との融合、新機軸となる文化の創造により、インバウンドをはじめとした「交流人口」の拡大や、地域ならではの商品開発に結びつけることで、文化の力による需要喚起を図り、地域の活性化につなげます。

(5) 未知なる発信！「あわ文化」ブランドの創出

様々なツールをフル活用した戦略的な情報発信により、徳島が世界に誇る「あわ文化」としてブランド化してきた『阿波藍・阿波人形浄瑠璃・阿波おどり・ベートーヴェン「第九」』の「あわ文化・4大モチーフ」や、「邦楽・ジャズ・クラシック」の「あわ三大音楽」をはじめとした、徳島ならではのブランドの発展・創出を図ります。

この「5つの目標」で掲げた「未知なる」というフレーズについては、新たな文化を創造するというだけではなく、人口減少かつ超高齢化社会に突入し、これまでのやり方だけでは、文化の継承にもやがて限界を迎える、そのためには、継承の手法にも既存のものではない、「未知なる」手法を導入すべきであるとの方針を打ち出しているものです。

茶道、華道、書道（香道）・・・日本の伝統文化を象徴して「三道」と呼ばれます。一朝一夕に成し遂げられるものではなく、日々の積み重ねが、振り返ると「道」になります。

文化芸術を、そのように捉えたとき、取り組む人たちにとって、日々の研鑽

の積み重ねにより、分野やレベルは違えど、新たな文化を切り拓き、「未知なる」領域に踏み込んでいくことで、向上心が養われ、達成感を覚え、苦しみの先に楽しみ・喜びが生まれることで、継続・発展につながるものと考えます。

まさに、「未知なる」世界への道を成す。

そこで、5本柱をまとめ、文化における目指すべき徳島の姿として、本計画においては、

「未知なる」世界へ！道成る「あわ文化」

を掲げます。

7 目標の具現化に向けて

本計画の目標に向けて、具現化を図っていくために、徳島県及び公益財団法人徳島県文化振興財団においては、各主体と連携しながら、次のような事業展開を図っていくこととします。

(1) 未知なる舞台！みんなで築く「あわ文化」

① 鑑賞機会の充実

- 幼少期から文化芸術への関心を醸成するとともに、子育て世代にも優しい鑑賞機会の充実を図ります。
- 公的施設を中心として、低廉な価格で質の高い文化芸術に触れる機会を提供します。

② 県民主役の文化活動

- 県民文化祭をはじめ、文化事業の開催を通じて、県内で文化活動する方々が、主体（主役）となれる発表の場づくりを推進します。
- 「東京オリンピック・パラリンピック徳島未来創造基金」を活用し、県内各地で展開される各種文化活動の支援を実施します。

③ 文化活動による共生社会の実現

- 作品募集や展示を実施することで、障がい者の文化芸術活動を振興し、ハンディキャップの有無に関係なく多様な文化活動が展開される共生社会の実現へ向けた取組みを加速します。
- 様々な文化活動を通じて、子どもから高齢者までが同じ舞台に立つことにより、世代間交流の促進を図ります。

(2) 未知なる開花！根付き、育てる「人材・才能」

① 「あわ文化」発展への顕彰の実施

- 徳島県では、顕著な功績を挙げた方に贈られる「徳島県文化賞」、これからの活躍を奨励する「阿波文化創造賞」により、あわ文化の発展に貢献した方を顕彰します。

- 徳島県文化振興財団では、文化芸術に功績を挙げた方に「とくしま芸術文化賞」、今後いっそうの活躍を期待する方に「とくしま芸術文化奨励賞」、優れた出版物に「とくしま出版文化賞」をそれぞれ贈り、顕彰します。

また、県立文学書道館では、徳島県内の文芸活動の活性化へ、「とくしま文学賞」を募集・選考し、顕彰します。

② 文化芸術団体の活性化

- 文化芸術団体等の活動の更なるステップアップを図るために、要望に応じ、文化創造アドバイザーとして、様々な専門家を派遣します。
- 文化芸術団体等における現在の取組内容やこれまでの成果について、様々な形での情報発信を通じて、広く周知を図ることを支援します。

③ 文化活動への若者参加の促進

- 文化芸術等のコンクールにおける優秀者に対して、県や徳島県文化振興財団において活躍の場を設けることにより、文化活動の活性化を図ります。
- 学校現場に芸術家や指導者を派遣することにより、レベルの高い文化芸術に触れることで、感性を磨き、素養を高めます。また、「あわっ子文化大使」の活動を加速化することにより、未来のあわ文化の担い手育成につなげます。

(3) 未知なる創生！文化の力で「まちづくり」

① 地域づくり・地域団体への支援

- その地域に遺る文化や風習を介在し、地域住民と地域との「絆」を醸成し、コミュニティの活性化を図ることで、子どもや高齢者の見守り、防災活動などに役立たせます。
- 地域団体やNPOによる、伝統文化や技法、伝統的建築物や景観といった、その地域に根付いた文化資源を保存・継承する活動を支援します。

② 地域文化を通じた郷土愛・地域愛の醸成

- 大学等との連携により、「新あわ学」をはじめとした、徳島に関する文化や歴史を体系的に学ぶことが出来る機会の創出を図ることで、徳島の魅力の再発見を促し、地域への誇りと愛着を醸成します。
- 国連のSDGs（持続可能な開発目標）に掲げられた「住み続けられるまちづくり」の実現へ、地域に根付く文化芸術の重要性を啓発し、県民一人一人が積極的に地域文化の魅力発信出来るように支援します。

③ 「徳島ファン」の活用

- 地方創生の実現に不可欠な、二地域居住やデュアルスクールなど、多様な形でその地域と関わる「徳島ファン」の増加を図り、伝統文化や伝統芸能の継承発展に活用します。
- 徳島にゆかりのある方、応援いただくファンの方から、地域の文化芸術を守り、発展させるための資金として、「クラウドファンディング型ふるさと納税」を募ることを通じて、あわ文化の魅力拡大を図ります。

(4) 未知なる融合！文化と経済の「好循環」

① 文化資源の活用促進

- 世界文化遺産を目指す、日本遺産「四国遍路」、「鳴門の渦潮」、世界農業遺産「にし阿波地域・急傾斜地農法」、世界の記憶への登録を進める「板東俘虜収容所跡」といった景観や伝統的建築物、化石、遺跡、妖怪伝承など徳島に息づく文化資源について、親しみやすい「観光コンテンツ」化を図ります。
- 徳島の文化資源を、外国人観光誘客（インバウンド）への活用拡大を図るため、多言語対応をはじめとした環境整備を促進します。

② 新たな文化の創造・発展

- 徳島ならではの自然や景観、伝統文化と、新たな文化芸術との融合や、徳島の誇るICT、LED、4K・8K、VRなど、最先端技術を活用することにより、徳島発となる新たな文化の創造を図ります。

- アニメ由来の映像や造型、音楽やファッション、さらにはアニメと親和性の高い「eスポーツ」など、クールジャパン戦略を徳島から先導します。

③ 文化による経済効果の発現

- 古民家を活用した民泊や、伝統技法の体験、景勝地や史跡への訪問など、徳島の歴史文化の旅行商品の造成や、芸術家やクリエイターを招いてのアートインレジデンスやフィルムコミッションの実施により、芸術文化による観光誘客を促進します。
- 阿波藍や阿波和紙をはじめとして、あわ文化から生まれた素材を活かした商品の開発を促進するとともに、地域文化から生まれた製品を優先して使用することについて、「エシカル消費」の観点から普及啓発します。

(5) 未知なる発信！「あわ文化」ブランドの創出

① 戦略的な情報発信

- 徳島が掲げる共通コンセプト「V S 東京」の観点から、徳島ならではの文化の魅力を、大都市との比較により際立たせるブランディングに基づく情報発信を展開します。
- あわ文化に関して、見たい知りたい情報が、必要な時に、可能な限りストレス無く届けられるように、情報発信の手法や体制の構築に努めます。

② 映像の効果的活用

- あわ文化の魅力を伝えるため、地域に根付く様々な文化に関する取組みを映像化し、ウェブやアプリケーションをはじめ、あらゆる機会を通じた積極的に情報発信を行います。
- 地域の映像コンテンツの発表の場として、国内外の映像クリエイターを招いた映画祭を開催し、徳島の映像文化と、映像を通じた徳島の魅力を発信します。

③ グローバル化の加速

- 「ラグビーワールドカップ2019日本大会」から、「東京2020オリンピック・パラリンピック」、「ワールドマスターズゲーム2021関西」の三大国際スポーツ大会、「G20消費者サミット」をはじめとした国際会議、さらには、2025年の開催が決まった「大阪・関西万博」などの機会を積極的に活用し、世界へ向けた効果的な情報発信を展開します。
- 阿波藍、阿波人形浄瑠璃、阿波おどり、ベートーヴェン・第九の四大モチーフをはじめとしたあわ文化を、国際的行事や展示会などを通じて、海外へ派遣することで、世界的認知度の向上を図ります。

8 各主体の役割

文化芸術の振興にあたっては、県民をはじめ、各種団体など、それぞれの主体が、その役割を果たすことを期待するとともに、県においては、これらの主体との緊密な連携、協働を図りながら取組みを進めて行く必要があります。

(1) 県民

徳島で育まれる文化を継承し、発展させていく主役である県民一人一人が、徳島の伝統・文化を学び、徳島に誇りを持って、新たな文化創造の担い手として積極的に活動されることが期待されます。

(2) 文化芸術団体

創造性を発揮した特色ある文化活動を実践することを通じて、県民の文化活動への参加意欲を高め、技術の向上と裾野の拡大を図り、「あわ文化」の振興に貢献することが期待されます。

(3) 教育機関

高度な芸術文化との交流や、伝統文化との学習機会を提供するとともに、「あわ文化」の担い手や指導者、コーディネイターとなる人物の育成に向けた様々なプログラムの提供が期待されます。

(4) 経済界

文化活動へ積極的な参画を図るとともに、文化資源を観光や商品開発に活用するといった経済的な展開を通じて、地域の活性化へ貢献することが期待されます。

(5) 市町村

県民に身近な行政機関として、文化施設や社会教育施設の運営や文化団体への支援などを通じて、その地域の特性に応じた文化振興を主体的に取り組んで行くことが求められます。

(6) 県

広域的な行政機関として、関連施設を運営や、国内外の様々な主体との連携を図りながら、文化へのニーズの多様化や環境の変化に対応し、総合的な視点に立った戦略的な文化振興に取り組みます。

9 計画の検証について

本計画の内容については、徳島県文化創造審議会において、毎年度検証を行い、必要に応じて適宜見直しを行います。